

本日の学び テーマ:「神からの問い」 テキスト:ヨナ書4章1-11節

【理解の手がかりとして】 参考(引用):『新共同訳 旧約聖書注解Ⅲ・続編注解』(日本基督教団出版局)ほか

ヨナ書4章は起承転結のいよいよ「結」である。鍵となるのは「ヨナの怒り」である。ヨナは主が二ネベを滅ぼすことをやめたその憐れみに対して激しく怒る。

2節を見ると、ヨナは「まだ国にいましたとき」に既に主とひとつのやり取りがあったという。これは読者には初耳である。そのやり取りとは、「どうせあなたは、恵みと憐れみによって、二ネベの裁きを思い直されるでしょう」といったものだったのかと思われる(想像)。

「恵みと憐れみの神であり、忍耐強く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方」(4:2)とは、神に対する古来からの認識(定式)のようである。→「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。『主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。』」(出34:6-7)

この信仰は人間に感謝と賛美を生むはずなのだが、ヨナにとっては立腹の種となった。そしてその怒りは自らの死をも望むほどのものであった。

4節にて、主はヨナを直ちに裁くことも見捨てることもせず、むしろ教育しようとして問いを発する。しかしヨナの言葉による応答はなく、彼は座り込みを決め込む。「都に何が起こるかを見届けようとした」(4:5)のであった。

しかしそこは日差しが強烈の場所、熱射の苦痛をめぐって、主はヨナに救いと苦しみを経験させる。言葉による説得よりも、「とうごま」「虫」「東風」に「命じ」(4:6、7、8)、具体的な体験を通して、ヨナへの教育がなされる。※東風:この地方特有の熱風。草木を枯らし、人間の思考力さえ失わせると言われる。

10-11節は主の最後の問いかけである。主は農夫のイメージを暗示して、自ら労し育てた作物に抱く愛惜の情にたとえつつ、大いなる都(二ネベ)の住人と家畜に対する御自身の悲しみを表現する。ヨナにとっては裁かれるべき対象といえようが、主にとってはむしろそれだけ一層憐れみの対象なのである。

#### ■ どうしてヨナは怒ったのか?とを考えてみよう。

ヨナの不満・怒りの原因はとても難解である。どうしてヨナは怒ったのか?

#### ■ 繰り返される「わたし」

ヨナの不満の申し立ての中に、数回にわたって繰り返し「わたし」という言葉が出てくる。このことをどう考えるか?

#### ■ とうごまの木～出来事からの問いかけ

神の人間ヨナに関わる関わり方は、常に出来事による問いの中にある。決して一方的な命令と強制ではなく、神に従うも逆らうも、問いと招きの中にある。「とうごまの木」というとても分かり易くも、しかし直接的でない比喩の中で、神はヨナを問う。

## ■ ヨナの神と聖書の神

「ヨナの物語には、神の《回心》、神の首尾一貫しない態度が、はっきりと示されている。しかし、まさにこのような神の姿こそ、ヨナは理解できなかったし、我慢することが出来なかった。ではヨナは、どんな神を思い描いていたのか？それは人間が作り上げた《完全性の理想》としての神ではないのか。悪をおこしたニネベに対しては、かならず罰が下されなければならない——それが完全性の理想である。しかし聖書の神は、それを否定している。ニネベに対する神の愛に記されているように、神は、欠け多き罪深い人間とも最後まで徹底的に関わりとうとすることを止めない。人間の完全性の理想の権化としての神と、まことの神の自由な愛との間に起こる絶対的な断絶——この中にこそ、ヨナをめぐる《神のユーモア》の秘密があるのではなかろうか」（『キリスト教と笑い』より）。

ヨナ書は、やはり主の普遍主義（異邦人をも包み込む憐れみ）とヘブライ人の偏狭主義とが見事に対比されている。しかし激しく反抗する主人公ヨナもまた、見捨てられることなく主の憐れみの中に置かれ、成長、脱皮へとつながられている。神の憐れみを自分の尺度で限定してそれを正義と主張する者に対しての大きい問いとチャレンジである。

→「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。」（マタイ 20:14-15）「ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみを起こさせるためだったのです。・・・一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。」（ローマ 11:11、25-26）

（聖書教育より）

「文字通りすべての人々が主に愛され、赦されているということを、私たちはどれだけ本気で受け止めているのか。そして『お前は怒るが、それは正しいことか』と問いかけ続け、主は私たちとの対話をあきらめないのです」（聖書の学び～すべての人が主に愛されている）・・・「対話をあきらめない」というのが鍵でしょうか。